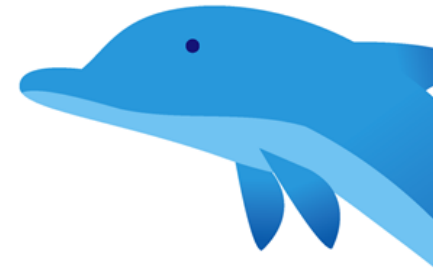


小中一貫教育教育校とは

二宮町教育委員 原 道子



いろいろ違う小学校・中学校と子供たち

- ・ 教師の意識の違い 近い : 距離感
- ・ 指導内容の違い
 基礎基本を具体的に : より高度な内容を抽象化
- ・ 指導方法の違い 手を貸す : 自主性を重視
- ・ 授業時間の違い 45分 : 50分



- ・ 中学校は面白い、部活動も楽しい
- ・ 学習意欲の低下
- ・ 進学に対するあきらめや自尊感情の低下
- ・ 個別の支援がうまくつながらない

○平成8年 東京学芸大学付属竹早中学校研究紀要
教育活動における不連続な変化が課題
A：教育内容の段差 B：指導法の段差
C：子供の心理・発達の段差

○平成16年 ベネッセコーポレーション調査
学校の好き嫌い、教科の好き嫌いは中学1年時に変化
がみられる

○平成18年 「北海道教育委員会調査」
断続的かつより高度な授業がつまずきを促進する

子供の心身の発達、成長の変化、多様化する
教科指導に対応しきれない学校システム

小中一貫教育制度の導入（2016年）

義務教育9年間の切れ目のない教育



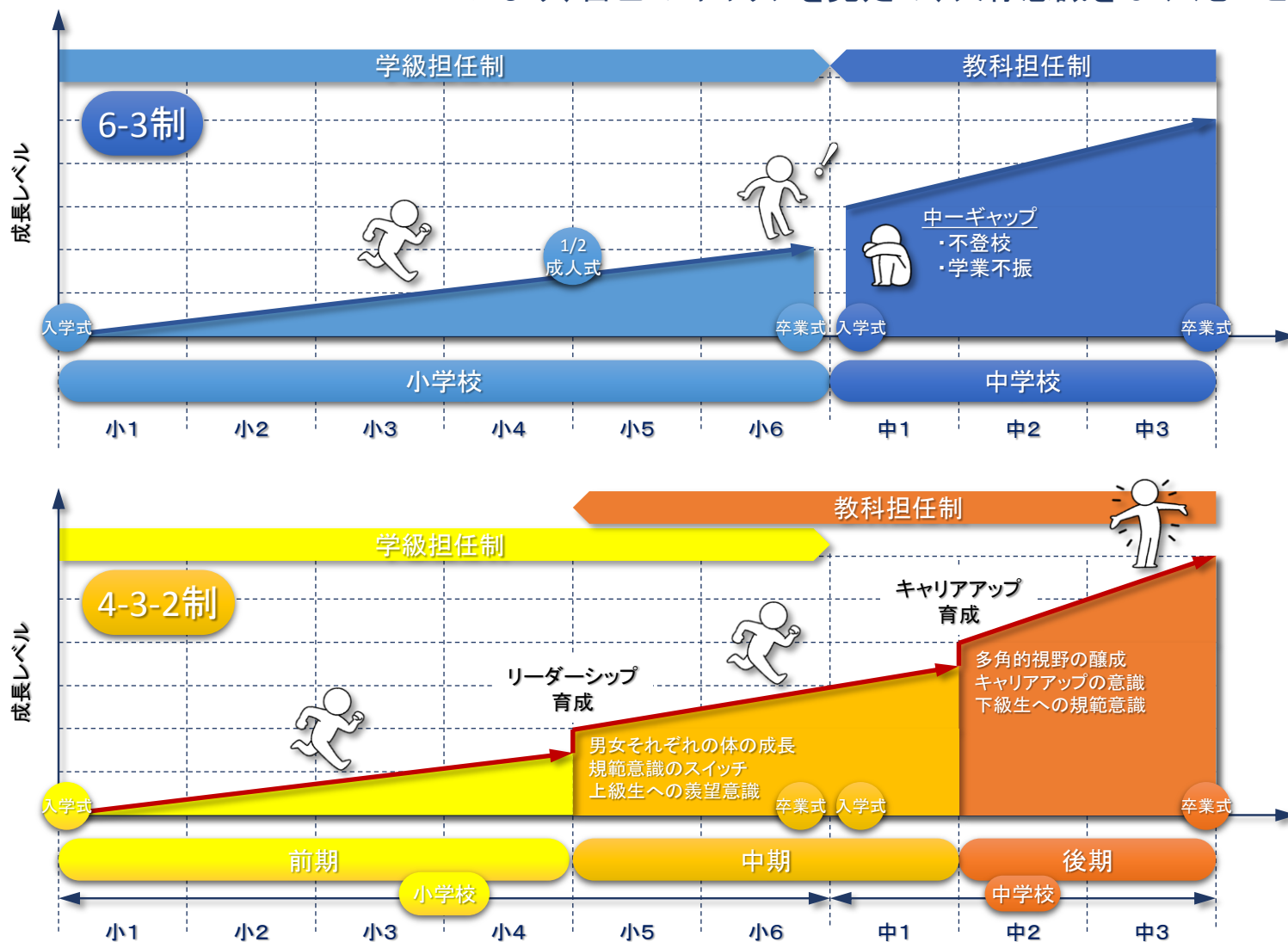
学校教育制度の多様化・弾力化・枠組の改善



- ・子供たちの学習意欲・教育効果の向上
- ・一人一人の成長を支え、可能性を伸ばす

小中一貫教育とは…

- 自己が芽生える成長期に9カ年の連続性を確保する教育システム
- 中一ギャップを解消し、最大9歳差が共存するメリットを生かすことにより、自己のキャリアを見定め、共存意識をはぐくむことができる



2020年（中学校は2021年）実施の学習指導要領

「2030年の社会と子供たちの未来」

中教審答申 H.28・12・21

- 予測困難な時代
- 社会の変化は加速度を増し、複雑で予想困難
- 受け身でなく主体的に受け止める力



言語能力・情報活用能力・問題発見、解決能力などを家庭・地域と連携協働しながら育てていくことが大切

学校教育のより一層の充実が必須

小中一貫教育における教育活動の特徴

切れ目のない教育とは

- 9年間を見通した教育内容の編成
- 9年間の発達状況をふまえたカリキュラム
- 個別の支援計画の充実
- 小学校での教科担任制
- 小・中の教員同士の密接な情報交換や研究
- 異年齢での交流
- 異年齢での学び合い
- 先の見通しがわかる学校生活

小中一貫教育で確認されている成果

平成26・29年度文部科学省調査・実践校の声より

1 子供にとって

- 授業への理解と学習意欲・学力の向上
- 学習規律・生活規律の定着
- 中学への進学への不安の緩和
- 中1ギャップの緩和
- 自己肯定感の向上
- いじめの問題の減少
- 不登校の減少
- コミュニケーション能力の向上

2 教員にとって

- 小・中学校の教職員間で協力して指導にあたる
- 特別な支援を要する児童生徒へのきめ細かな指導が充実する
- 小・中学校の教員間で互いの良さを取り入れる意識が高まる・・・指導力の向上
- 小・中学校の指導内容の系統性について教職員の理解が深まる
- 児童生徒指導上の問題が解決しやすくなる

3 保護者にとって・地域にとって

- 学校への満足度が高まり協働関係が強くなる
- PTA活動の負担が減り、活動が活性化する
- 異校種に関わることで子供理解が進み、不安が解消される
- 地域が育てたいと思う子供像を学校と共有できる
- 9年間の子供の育ちを理解し、地域の果たす役割を知ることができる
- これまで比較的少なかった中学生との交流が増え、スキルを活用して教育活動に関われる

小中一貫教育における課題と対応策

平成26・29年度文部科学省調査・実践校の声より

1 子供にとって

- 9年間人間関係が固定される

 - ⇒適正な学級数と異年齢間の自浄作用

- 施設分離型の場合、交流のための移動時間がかかる

 - ⇒テレビ会議で交流

2 教職員にとって

- 小・中学校間の打ち合わせが増える

 - ⇒テレビ会議

- 施設分離型では移動に時間がかかる

 - ⇒テレビ会議

なぜ二宮町は小中一貫教育に注目したのか

- 1 子供たちはこれからの世の中、時代を生きる
- 2 これからの世の中、時代がどうなっているか
予測は不可能
- 3 より力を付けるにはさらに充実した学校教育
が求められている
- 4 教科内容の変化や多様化の一方で少子化
小中の連携は時代の要請
- 5 子供たちのために中一ギャップの解消や適
正な学校規模が必要

小中一貫教育校設置に向けた取り組み 研究を始めて今年は4年目

二宮町では小中一貫教育校の開校に向けて2016年度から研究・検討を始め、2017年度から具体的に小中連携教育を進めてきました。

小中連携教育を小中一貫教育につなげていきます。

二宮町での研究①

中学校の教員が小学校英語の授業に参加

2017年度, 2018年度

小学校の英語の学習で、中学校の英語科の教員が3つの小学校を回って、小学校の教員と一緒に英語の授業を実施

成果：小学校教員が「生きた英語が使えることをめざす授業」ができるようになった

二宮町での研究②

2017年度

教科ごとの小・中の学習指導要領の読み込み

2018年度

校種を超えた授業公開・参観・振り返り

小・中教員の交流、相互理解

成果：小・中の学習指導要領のつながりへの理解が深まった

京都大原学院（京都市立大原小・中学校）

- ・ 児童生徒数の減少 = 学校存続の危機
- ・ 「学校がなくなれば地域が消える」 ・ ・ 地域の強い思い



小中一貫教育校



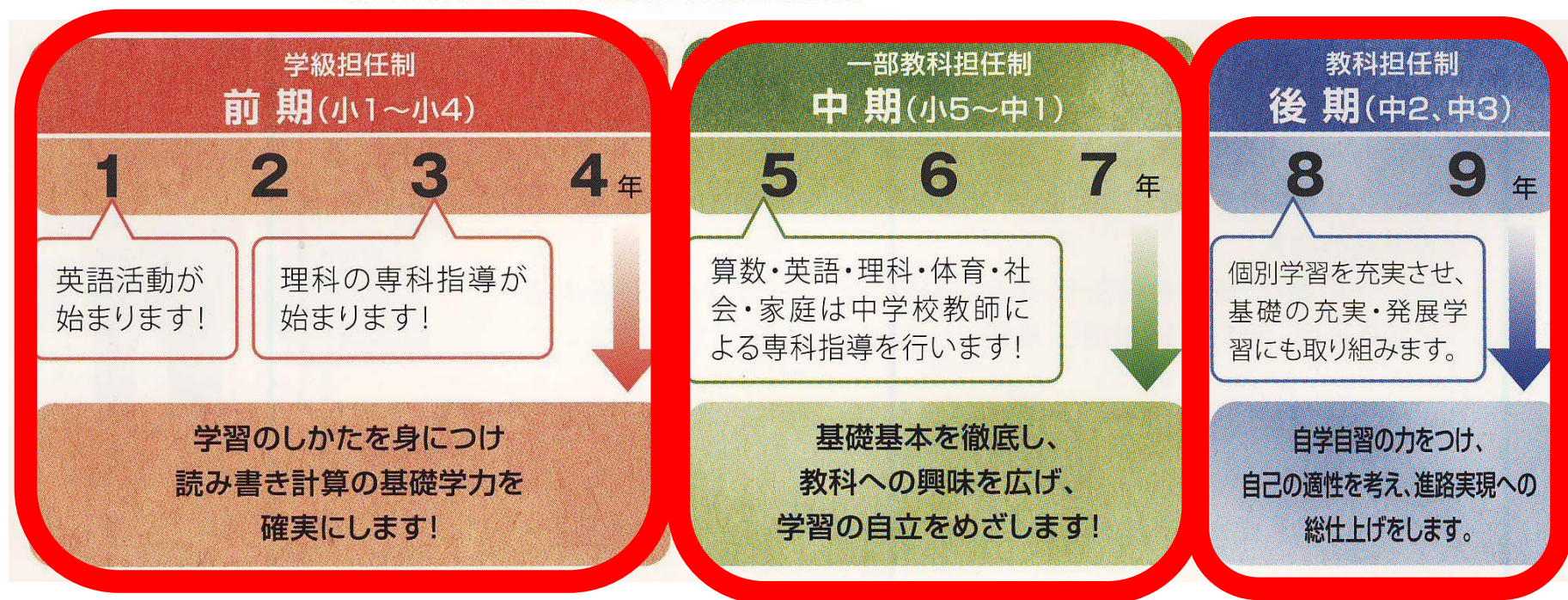
2018年 義務教育学校に

- ・ コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校教育づくり
- ・ 地域が育てたい子供像を学校と共有し教育目標を決めた

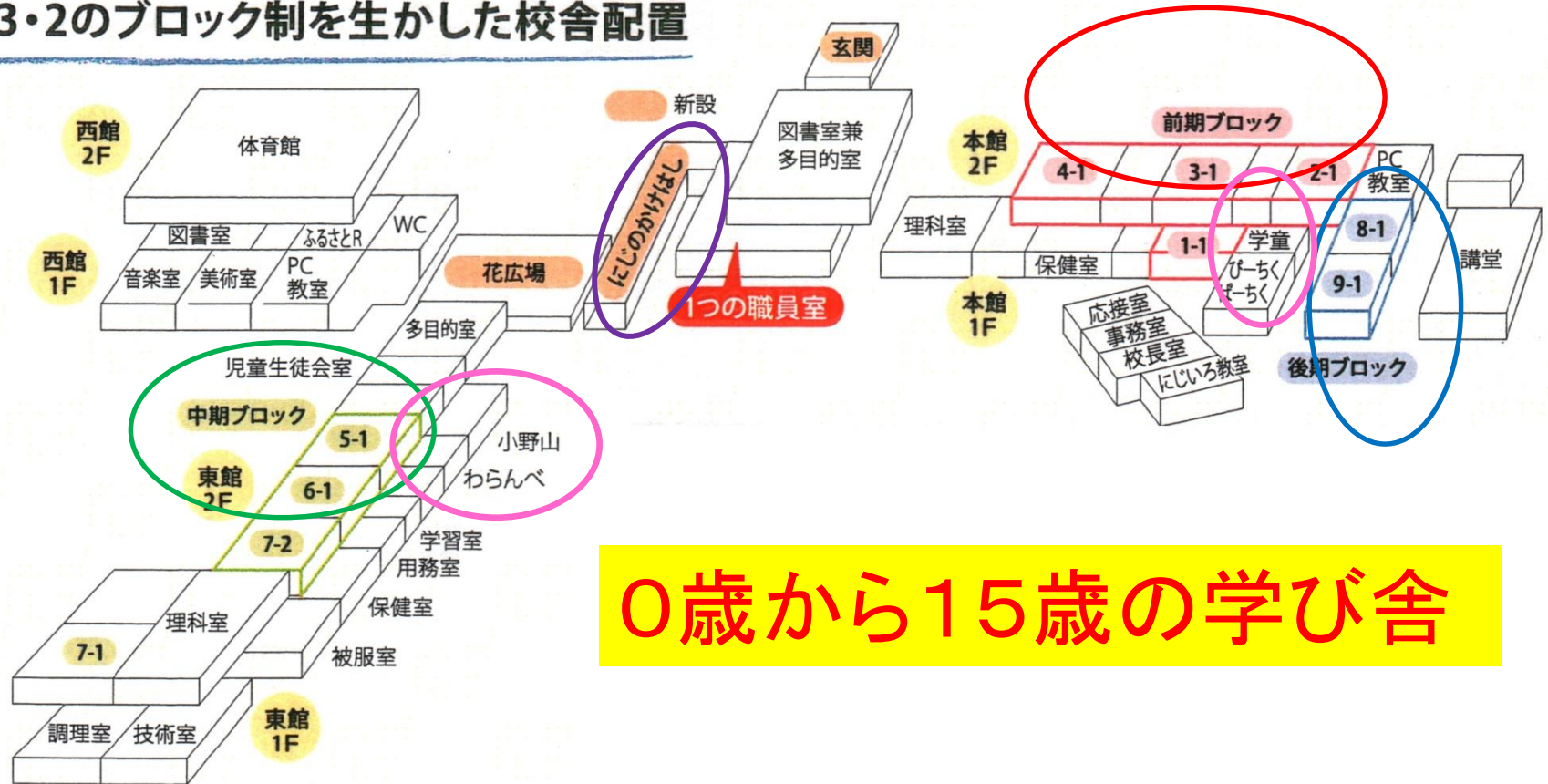


小中一貫教育の充実 ブロック制の導入

6・3制 ▶ 4・3・2制へ



4・3・2のブロック制を生かした校舎配置



0歳から15歳の学び舎

